



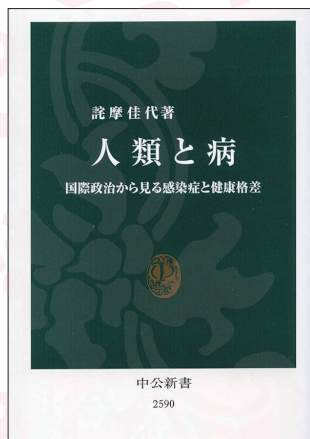
Title	書を抱えてフィールドに出よう！
Author(s)	戸田, 登美子; 白野, 倫徳
Citation	目で見るWHO. 2025, 92, p. 32-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102315
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書を抱えてフィールドに出よう！



人類と病 国際政治から見る感染症と健康格差

著 者：詫摩佳代

出版社：中央公論新社 2020年4月発行

回人口が激減したのか、これ以上の説明は不要でしょう。

また、私たちが「天然痘は根絶した」と何度も読んできた一文の裏には、何が行われたのでしょうか。この書では天然痘根絶に尽力された蟻田功先生によるプログラムも具体的に紹介されています。いかにワクチンの質を担保し、どうやって途上国でも製造可能にしたのか？大量に接種器具を生産でき、簡便に早く、しかも痛みも少ない接種方法をどう確立したのか。これだけでも十分な難題ですが、ある程度ワクチンが行き渡った後が厄巻です。世界の果てまで患者を探し出すという、気の遠くなるような取り組みに本

当に驚嘆しました。

何世紀を経ても病と共生する私たちの状況は変わりませんが、それでも読了時には希望が感じられます。それは、この書から著者の先人に対する尊敬の念が感じられるとともに、随所に挿入される豆知識的な一文によるのかもしれませんが、郷土玩具の赤べこやさるぼぼがなぜ赤いのか、ご存じでしょうか？どれほど医療や技術が発展しても、病は常に人々の営みと隣り合わせにあることを再認識させてくれる一冊です。

(紹介者：戸田登美子)

今まで人々がどのように病と関わってきたか、その取り組みについて背景を交えて平易な文章で記されています。冒頭から中世のペストやコレラの描写に引き込まれます。当時、人々がどのような状況で暮らし、これらの疾患に侵されていたのか、その様子が眼前に鮮やかに映し出されます。なぜ何度も流行し、毎



死の貝

著 者：小林照幸

出版社：新潮社 2024年5月発行

た。臨床医らは各地で患者と向き合い、基礎研究者らは病原体やその感染経路を突き止めるべく努力を重ね、そしてミヤイリガイという貝により媒介される新種の寄生虫症であると判明すると、公衆衛生関係者らが無防備に水に入らないよう呼びかけたり、ミヤイリガイの殺貝を試みたりするなど、公衆衛生対策に取り組みました。臨床、基礎、公衆衛生の三者が協働して感染症の対策に取り組むさまは、現在の感染症対策にも通じるものです。さらに、日本住血吸虫症対策の歴史は海外からも称賛され、中国や東南アジア諸国などでほかの寄生虫症の対策にも応用されました。古くから日本の感染症対策は世界に誇れるものであることを実

感できます。

著者がこの日本住血吸虫症との闘いについて取材し、「死の貝」を刊行した1990年代はまだ20歳代でした。現在のようにインターネットで簡単に情報収集できるわけではなかった時代に、これほど綿密な取材をされたことに驚嘆します。さらに、引き込まれてしまう魅力的な文章で、ノンフィクションでありながらまるで小説のように一気に読むことができます。

日本の感染症対策の歴史、国際保健との関わりについても垣間見ることのできる、お勧めの一冊です。

(紹介者：白野倫徳)

本書は元々1998年に文藝春秋社より「死の貝」として刊行されましたが、加筆修正され、新たに「死の貝 日本住血吸虫症との闘い」というタイトルで文庫化されました。

山梨県、広島県、福岡県および佐賀県という互いに離れた地域において、原因不明の疫病が流行し、なすすべなく多くの人が亡くなっていく現状がありまし